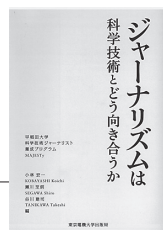


書評

専門の垣根を越えること

岡本暁子・西村吉雄・若杉なおみ編
科学技術は社会とどう共生
するか

東京電機大学出版局 2009年
A5判 205ページ 2625円(税込)

小林宏一・瀬川至朗・谷川建司編
ジャーナリズムは科学技術
とどう向き合うか

東京電機大学出版局 2009年
A5判 256ページ 2625円(税込)

長神風二 ながみ ふうじ
(東北大学脳科学グローバルCOE)

「私、科学はわからなくて…」——所属・身分に「科学」が入っている筆者は、初対面の相手からしばしば言い訳じみた挨拶を受ける。科学技術とは、“普通”の人にはわからないことが正常であり、素人であることを表明するとプラスに作用するものとして受け取られているようだ。専門家の語る専門的なことは、多数の素人にはわからず踏み込めない。素人が理解しようとはしない専門性とは、社会にとって何なのだろうか。

本稿で取り上げる2冊は、早稲田大学で2005年に始まった「科学技術ジャーナリスト養成プログラム」(通称: MAJESTy)で行われたシンポジウムや講演などを元に編まれている。MAJESTyは、

科学技術の世界と社会とを“つなぐ”役割を担う人材の育成を目的とした、国家的なプロジェクトの一環で設置されたプログラムだ。

『科学技術は社会とどう共生するか』は、第一線の科学者や科学技術論学者の論考から始まり、社会の中での科学の位置づけにつらなる主題が十人十色に語られる。通底しているテーマは「不確実な時代の科学リテラシー」といえるだろうか。白川英樹氏、左巻健男氏など、科学研究・科学教育に身を置く執筆陣からは、日本の科学リテラシーを支えるジャーナリズムと教育の貧困が語られる。白川氏のノーベル賞受賞時の取材で、かえる跳びやダンスの質問が多かったエピソードや、内田亮子氏のきわめて劣悪な被取材経験など、いずれも具体的な体験に裏打ちされている。設立されて間もないプログラムに対する大きな期待の裏返しとして、現状の問題点を端的に伝えようとした話者たちの思いが伝わってくる。ただ、ライブのイベントの場ならいざ知らず、1冊の本となったものを読むと、学者たちはジャーナリストと相容れない、という印象が読者に形成されかねない。編集に配慮がほしいと感じたところだ。

一方、本の半分にはマイクロプロセッサの開発史(西村吉雄氏)、エイズ(若杉なおみ氏)など、具体的な事象に絞った各論が掲載されている。ジャーナリズムによる技術史の伝え方、技術および技術者への評価のあり方を問いかけるもの(西村氏)や、環境のリスクコミュニケーションに関するアメリカの事例を紹介しながら、今後のあり方を考察する小論もある(村山武彦氏)。興味深いテーマの各論は、読者への興味喚起として働けだろう。

一方、『ジャーナリズムは科学技術とどう向き合うか』には、主にジャーナリストの手になる科学技術へのスタンスに対する自己批判的な文章が

ら、科学ジャーナリズム史研究的な論考までがおさめられている。そもそも定義も存立基盤もあいまいな科学技術ジャーナリストというものに対して、明確な輪郭線までは描けないにしろ、複眼的な視線による像を示そうとしている。地方紙が外国の科学技術関係の事例をどう報道してきたか(飯島裕一氏)は、ほかではなかなか見られない論述だし、イランや北朝鮮を取材した科学誌の体験談(Richard Stone)など、貴重な論考もある。さらに、プログラムで購入した「プランゲ文庫」という占領期の雑誌記事などの網羅的なコレクションをもとに、60年前の科学報道を検証するという、地道だが意義ある作業の成果の一部もある。

双方を通読しての最初の正直な感想は、多くの各論は魅力的なものの、なかなか全体として像を結ばないということだ。シンポジストも含めれば、30人以上もの口頭発表を2冊に編んだ事情もあるが、「どう共生するか」「どう向き合うか」という重いタイトルには、正面から応えたというよりは各論でかわした、という印象だ。

『ジャーナリズムは…』の最終章を例にしよう。「検証! 科学技術報道」と題したシンポジウムの採録だが、ここで、「メガホン科学」の問題が挙げられている。研究費獲得などの思惑から、小さな懸念を大きく発言したり、小さな成果を大きく見せかけたり、といったことを指している。質疑応答採録の形で、これに左右されない記者側の対策として、多くの研究者の意見を聞いて判断する、といった心得が語られる。もちろん、心得として大事ではあろうが、果たして、一記者と取材先の関係の中だけで片づけてよい問題だろうか。

研究機関で広報を担う筆者には、これは、すぐれて構造的な問題に感じられる。各研究者が行う個別研究の広報、大学・研究機関などの機関広報、そして研究分野全体での分野広報では、それぞれ目的が違う。それぞれに広報が確立していない上に、互いが不干渉であろうとしていることが、「メガホン科学」が野放しにされる一因である。

個別研究者レベルの「メガホン科学」は、多くの場合、大学や研究機関など所属する機関レベルの広報を阻害する。機関広報は、個別研究者の「眉唾」な発表に、大学や研究所がお墨つきを与えているかのような印象を免れるように努力するのが本来の姿だ。また機関広報レベルでは、あるプロセスの一端を明らかにしたに過ぎない研究成果の発表を、さもプロセス全体を解き明かしたかのように語ってしまうことは、自省も含めて少なくない。だが、学会など研究分野全体のレベルの広報が機能していれば、そうしたことへのブレーキとなるはずだ。日本の科学広報の現状においては、それぞれのレベルの広報同士が、互いに干渉するような形でのコミュニケーションをもっていない。互いの不干渉性による悪影響に、多くの心あるジャーナリストは気づいているはずだ。

さて、ジャーナリズムの役割である。科学広報がもつ、たとえば前述のような問題点に、一つのステークホルダーとしてメスを入れ、かつよりよい形になるような提案・行動を行うことも、ジャーナリズムの役割なのではないか。ジャーナリズムには、中立性を重んじるあまりに、とかく当事者になることを嫌う傾向を感じる。それはそれで正しい面はあるのだろうが、科学技術がもつ問題点に対して、その問題から生じる悪影響から身を守る論に終わらずに、深く踏み込んで自らの力で科学技術そのものを変質させることも覚悟する、という姿勢をとることはできないものだろうか。前述の例で言えば、「メガホン科学」を見分けるだけでなく、それが生じる構造に踏み込み、その変化を促すようなことである。

社会と科学技術が「どう共生するか」においても、ジャーナリズムと科学技術が「どう向き合うか」においても、互いの専門性に踏み込み、互いの変化を促すような関係を構築していくことが重要だろう。今回取り上げた2冊の本の美しい各論が、それぞれ問題や課題の紹介に終わらず、対象に変化を促すよう発展していくことを期待する。